

第 9 回〔IV〕実社会における議論力と企画デザイン力を鍛える

（2）対話力・議論力を訓練する・・・論理的思考力とコミュニケーション力

時代の潮流変化は、「社会の学習様式のあり方」にも根本的変容を求めています。情報社会はグローバル化の進行と一体となり、私たちに多様で異質な背景をもつ人々との不断の対話と共通理解、そして相違する利害の調整活動の必要を否応無しに迫っているからです。変化が激しく未来を予測できない時代への対応能力の基本要件の一つは、「情報を読み解く力」即ち、「問題感知力」を磨くことです。そしてもう一つの重要な要件が、「他者と協力する力、他国とコミュニケーションする力」にあります。

小職が実践的に取り組んでいます JUAS（社団法人日本情報システム・ユーザー協会）主催の中堅社員向けの「問題感知力を磨くための“問題解決手法勉強会”（以下、「本勉強会」と呼ぶ）」の研修プログラムでは、「プロジェクトベース・方法知・チームビルディング・言語技術」の 4 点を柱としてコースウェアをデザインしています。「5 人一組」となって、新規事業を企画立案し提案することをゴールとしています。「チーム」で「情報収集→問題発見→原因分析→企画構想→提案発表」の一連の問題感知と解決プロセスに取り組みます。自分の考えを相互に伝え合い、批判的に検討しチームとして纏め上げていく過程では、対話力と議論力が全ての活動の「エンジン」となります。本勉強会の全工程で、言語技術教育の基本的視点に立った「分かり易い説明方法」の訓練を取り入れ、分析・企画・提案の文章化作業においても終始一貫して「論理の三角形」を基本モデルに論証する方法を採用して「5 人一組のチーム」での研修が遂行されていきます。

情報を読み取る力＝読解（Critical Reading）力の基礎である言語技術（Language Arts）は、コミュニケーション力の基礎でもあります。本メルマガでは、「議論力」の必要の意味合い、「対話」を円滑ならしめるための「分かり易い」話し方の具体的な意味合い、そして議論がかみ合うための基本的な議論の枠組み（モデル）についてご紹介します。

対話・議論とチームワークの日常性

私たちの普段の仕事は、社内および社外の関係者との協働作業で遂行されるのが一般です。お客様や協力会社の関係者との間でもチーム関係を形成します。一定期間に特別に「プロジェクトチーム」が編成される場合には、選出されたメンバーは所属組織（社外組織を含めて）の機能を代表することから、当該テーマに関連する情報の収集と共有には意識的に神経を張り巡らせるため、「コミュニケーション」の重要性には特に注意を払うこととなります。

チームメンバーが協働作業を上手く進めることができるか否かは、目標実現の効率や効果に直結します。チーム全体のリーダーの統括力や調整力の重要性は勿論のことですが、個々の役割を受け持つメンバー各自が持ち場に応じてリードし合う関係を担います。従って各自は他者に対して「フォローする役割」を上手く果たすことも、相互の役割の受け手として重要です。

「チーム」で仕事を遂行する場面で最も多い日常的コミュニケーション手段は、「話し」をすることと話を「聴く」ことでしょう。そこで参加者一人ひとりの自分の意見の「説明力」と他人の意見への「傾聴力」、総合して集団としての「議論力」の巧拙の如何が重要になります。

対話と議論の上手・下手

上手な議論の進め方とはどういうことを指すかの定義は案外に難しいものです。しかし、その反対の「下手なケース」を想定することは経験上から容易ではないでしょうか。

発言の内容が、何を言いたいのかよく分からない場合があります。主張や意見の結論がはっきりしないことが原因です。何故そのような意見になるのかわからない場合があります。主張の根拠・理由が明示されないことが原因です。発言者の内容に対して、無関係な応答をして主題から外れる場合もあります。「関連性」を欠くことが原因です。

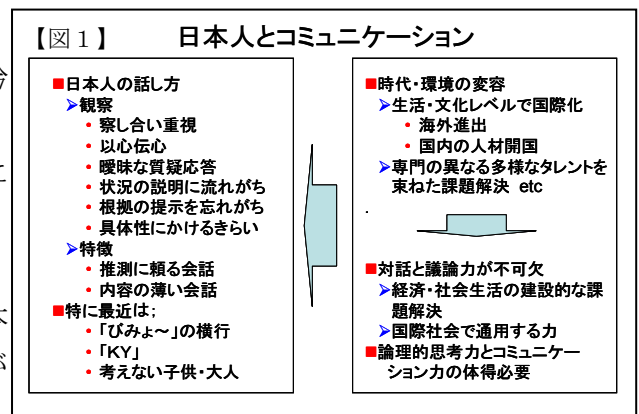
ある発言の主張・意見に対する応答の「態度」には、大きく分けると「実証」「解釈」「批判」の3つのタイプがあります。相手の発言の主旨に支持を表明する事象（事例）を列記して応える姿勢は「帰納的」な場合が多いでしょう。発言の意味することから展開する場合には「演繹的」姿勢の場合が多いでしょう。更に、“時代が違えば？”“国が違えば？”“状況が違えば？”などの異なった観点から吟味を行う姿勢には、「Pro（賛意）」「Con（反対）」の検証を「批判的（critical）」に展開している場合が多いでしょう。概ねこの3つの態度で相互の発言内容が交互にスムーズに「咬み合う」場合には、そのチームの会話は「論理的」連鎖を形成して、「建設的」な議論が交わされていると観て良いと考えます。このことが議論の上手・下手を決定づけます。

このように、議論の上手と下手を左右する分かれ道には、一人ひとりの話し方が「論拠をもって論理的で分かり易いものかどうか？」どうかの基本があります。本メルマガの前8号で触れた「論理の三角形」がキチンと組立てられて、「意見→事実とデータの具体的引用→その裏づけ」が取れている場合には「分かり易い」説明となります。

「問答ゲーム」による「説明する力」の訓練

私たちが日常的に参加する経済活動・社会的活動においては、チームの成員として、自身の意見を述べる機会にあふれています。自分の考えを分かり易く相手に伝えるには、考えを整理し、筋道を立てて伝えることが必要です。

日本人のコミュニケーションに対する姿勢を吟味すると、一般に欧米人には「言葉による説明」の態度が習慣として徹底して身につけているのに対して、日本人には「論理的に議論すること」をあまり潔しとしない文化があります〔脚注1〕。しかしながら、図1に見るとおり、国際化は日本企業の海外進出は一人ひとりにとって海外居住が珍しくない状況を生み出し、生活・文化レベルで



の日常的な国際コミュニケーションが当たり前の時代を日本人も迎えております。欧米流の「対話・ロジック・コード」に対して、日本人の「以心伝心・感性・コンテキスト」流では通用しない時代に入っています。

小職が実践している本勉強会では、勉強会の初期段階に言語技術の基礎レッスンとして、(有)つくば言語技術研究所の三森ゆりか代表が企画開発された「問答ゲーム」を採り入れています。

1 本メルマガ連載の第7回・頁3「大野晋氏は、日本人はこれまで、「一を聞いて十を知る」ことが可能な日本語の特性をつくりあげてきたが、物をよく見て、構造的に体系的に考えをまとめるという習慣を養わない限り、日本人はこれからの世界を生きて行けない。行政でも会社運営でも、事実、真実に対して謙虚に論理的に見抜く習慣を養わないと駄目だ、と述べています。」

けて終始一貫してトレーニングするコース設計をしています。【図 4】が示す「文章化のサンプル」は、デジタル化とネットワーク化によって音楽産業で生じている事象を分析しまとめる作業を、論理の三角形の骨格で説明する形式の基本モデルを示しています。

議論のモデル(layout of Argumentation)

自分の考えや意見を説明するとき、それが説得的であるには論拠を示して意見の正しさを論証します【脚注3】。正しさを保証する根拠の一般は、論理的であることです【脚注4】。論理的思考法という一般に「演繹法」と「帰納法」が基礎的説明に登場します。これに対して、日常的な議論の展開のあり方をモデル化(【図 5】)して分かりやすく説明してくれているのは、英国の哲学者の Stephen Toulmin 先生です。トゥールミン先生は哲学者として紹介されていますが、この「議論のモデル」は、むしろ米国の critical

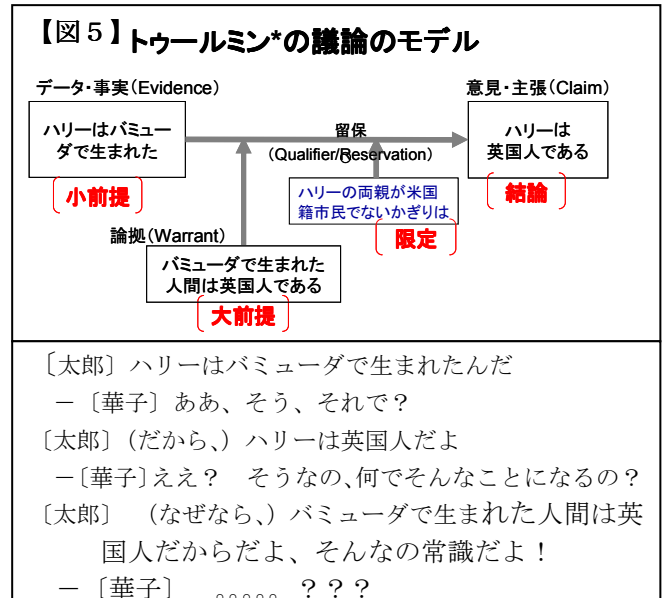
reading、critical writing を教える大学 (College) の先生方などの学界で、議論の構造を説明するモデルとして一般的に用いられ大変に大きな貢献をしているようです【脚注5】【脚注6】。

意見を述べるには、「事実・データ」を引用し、裏づけとなる「論拠」を述べて支えるという構造を取ります。実社会では更に様々な条件が付帯するため、当該の言明を「限定」する場合があることもモデルでは示しています。私たちが社会問題を取り扱う場合、企業での問題解決や新規事業への進出などを検討する場合の議論に、この議論のモデルの基本形に分解して、議論の流れを順を追って分析的(構造化して)に検証することは、議論の曖昧さや混乱を解消して建設的な討議によるコンセンサス創りの基礎となることは言うまでもありません。

現在の私たち社会人は、様々な分野や領域で、社会が大きく変化し、新たな視点でこれまでの仕組みや社会システムを改革・改善することを喫緊の課題として突きつけられています。こうした状況にある場合には、多様な意見や価値観を持った人々の、一様で同質ではない異なる意見やアイデアに耳を傾け、異質な考え方を検討の俎上に載せた上での議論を建設的に行うことによって、従来の発想を超える根本的解決策を新たな社会システムとして創造することができるようになるはずで、従って、私たち実社会で課題に直面している社会人にとってこそ、実際の企業活動やコミュニティの活動の中で、「議論力」や「対話力」のレベルアップを図ることが、実践的で具体的な次元で問われ、求められている課題ではないでしょうか。

以上

(メルマガ第 9 回)



3 広辞苑「説明」: ①事柄の内容や意味を、よくわかるようにときあかすこと、②(explanation)記述が事実の確認にとどまるのに対して、事物が「何故かくあるか」の根拠を示すもの。科学研究では、事物は因果法則によって把握すること

4 正しさを保証する根拠として一般に、力による正しさ/制度的な正しさ/数理的な正しさ/「事実」の正しさ/論理的な正しさが列記されます。「論理思考と発想の技術」後正武著

5 Stephen E. Toulmin 英国人・哲学者、”The Uses of Argument”1963 が代表著作

6 “The Bedford Reader”(10th edition) by X.J. Kennedy, Dorothy M. Kennedy, Jane E. Aaron /BEDFORD ST. MARTINS: Chapter 13 ARGUMENT AND PERSUASION - Stating Opinions and Proposals